

X オンラインサマープログラム

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学国際連携推進機構 公開日: 2024-02-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 案野, 香子, 池田, 聖子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000220

X オンラインサマープログラム

案野 香子／池田 聖子

1 はじめに

令和4年度は、オンラインによる国際共修の実践の試みとして、海外協定校の学生と静岡大学学生が「外国人との共生」という一つのテーマに基づいてグループディスカッションや発表、および学生間交流を行った。本プログラムの最終目標は、修了し自社会に戻ったときに、今までとは違った観点で自分自身や世界を見られるようになることである。

2 プログラム実施条件

日時：2022年8月1日(月)～8月10日(水)

13:30～16:30（日本時間） 180分×8日

大学間協定校参加者：合計9名

（インドネシア教育大学、マラヤ大学、朝鮮大学校、台北科技大学）

日本語能力試験N3～N2程度

静岡大学学生（留学生含む）：合計6名（情報学部、人文社会科学部、教育学部）

修了証：協定校学生には静岡大学国際連携推進機構による修了証発行

使用言語：基本的に日本語

コーディネーター：案野香子、池田聖子

3 プログラム内容

【表1】 オンラインサマープログラムスケジュール

時 期	内 容
7月中旬	静岡大学学生に事前研修
7月末	海外学生に事前学習送付
①8/1(月)	オリエンテーション アイスブレイキング(1)「友達と信頼関係を築こう」 知識の導入：「多文化共生」とは
②8/2(火)	アイスブレイキング(2)「静大生と信頼関係を築こう」
③8/3(水)	日本語講師（ゲストスピーカー）による静岡の多文化共生事例紹介と話し合い 17:00 ワークシート提出
④8/4(木)	グループ分け、話し合い・グループワーク開始
④8/5(金)	オンデマンド グループワーク 18:00 作成中の発表資料を提出、教師からのフィードバック
⑥8/8(月)	日本文化体験 アニメにアテレコ
⑦8/9(火)	グループディスカッション テーマごとに報告 18:00 発表資料提出
⑧8/10(水)	最終発表会、まとめ、振り返り 修了レポート提出「私にとっての多文化共生」、修了証

3. 1 事前学習

本プログラムに参加する静岡大学学生は、静岡・浜松両キャンパス国際交流ラウンジ（P22）およびグローバル・アジア特別教育プログラム（P53）の担当者に依頼し、海外学生との交流と異文化理解に関心のある学生を募集した。

静岡大学学生（以下、静大生）は、学習者の単なる会話パートナーではなく、プログラムのアイデア出しなど、企画立案段階から関わる役割を担った。事前研修では、コースの目的を理解し、海外学生の参加申込書の学習内容希望欄を参考に、学生目線からプログラム内の日本文化体験の内容とディスカッションのテーマを決定した。

海外学生にはプログラムの概要、事前学習としてゲストスピーカーとなる本学日本語講師3名からの「問い」を送付した。日本語講師3名は、本学以外に日本語学校、外国とつながる子どもの日本語教育にも携わっており、来日から間もない留学生が経験するカルチャーショック、外国ルーツの子どもを預かる日本の学校教育現場で感じる難しさをプログラム開始までの動機付けとして事前に思考を促した。

3. 2 プログラム実施

プログラム初日には、海外の大学で学ぶ学生が初対面の相手に日本語を安心して話せる環境を整えるため、海外学生のみでアイスブレイキングを行った。「全体自己紹介」のあと「スウジコショウカイ」（注1）を行い、数字を用いて自分のオリジナリティを語ることで相互交流を促進した。

その後、自分の思う「多文化共生」の定義、イメージ、楽しさ、難しさとその原因・解決策をグループで話し合い、全体で共有し、プログラムの導入とした。

2日目は、静大生と海外学生がそれぞれお気に入りの場所の写真や動画を紹介し、相互理解を深めた。海外学生は静大生の絵描き歌を聞いて画用紙に絵を描き、各々の個性あふれる作品を見せあった。また、ある静大生が折り紙ワークショップを行い、折り方の動画を海外学生の作業スピードにあわせて繰り返し見せることで、全員が「鶴」を完成させることができた。

3日目は、海外学生たちが日本語講師3名それぞれのグループに分かれ、事前配布された「問い」に対する考えを述べ、講師や海外学生相互で意見交換した。

事前配布された「問い」は以下の通りである。

【講師A】

- ① 初めての冬に留学生が失敗したこと。
- ② 留学生が日本の子どもたちを見て驚くこと。
- ③ 日本の歌ではよく使われているけれど、日常会話ではあまり使われていない言葉。
- ④ 留学生がコンビニで働いて驚いたこと。
- ⑤ 同じ場所にゴミ箱が3つある理由（写真を見せる）
- ⑥ 留学生のために必要なトイレの注意書きとはなにか。

【講師B】

- ① あなたの周りに文字や言葉が違うために困っている子どもがいるか。
- ② 親の都合で言語や習慣の違う国に来た子ども（5歳くらい）はどんな気持ちでいる

か。その子どもの立場で考えてほしい。

- ③ 小学生が親といっしょに外国に引っ越しして、その国の学校で勉強しなければならないとき、どんな準備をしたらいいか。
- ④ 小学生のとき、自分のまわりに外国から来た子がいたら、どのように接したいか。
- ⑤ あなたが小学校の先生だとしたら、クラスに言語がぜんぜんできない子どもが入ってきたらどうするか。

【講師C】

- ① これは何か。どこで食べるか（給食の写真、お弁当の写真）
 - ② これは何をしているところだと思うか（家で親が子どもが宿題をしているのを見ている写真）
 - ③ 日本の高校の制服です。どう思うか（性別ごとの制服。ジェンダーレスの制服の写真）
- その後、ワークシートに講師A、B、Cとの話題共有で印象に残ったこと、今後考えたいテーマを記入し、コーディネーターに提出した。それをもとに、コーディネーターは学生にとって関心の高いテーマを整理した。

4日目は前日のワークシートから学生の理解が十分でないと思われた、外国ルーツの親子の日本語力の差によってコミュニケーションが成立しなくなる問題や、制服にジェンダーが配慮されていることについて、コーディネーター主導で改めて全体で考えた。その後、学生主体でグループ分けとそれぞれのテーマを決め、最終日の発表会に向けてグループワークを開始した。3つのグループのテーマは次のとおりである。

- ① 「生活習慣（ゴミ問題、給食、制服）」
- ② 「コミュニケーション（ジェスチャー）」
- ③ 「ジェンダー」

5日目はオンデマンドの日とし、グループワークを行い、18:00までに作成中の発表資料を提出させ、それに対しコーディネーターがさらに思考を促すコメントをした。例えば、生活習慣の違いで外国人の自分が差別される側だったらどうするか、ジェスチャーや表情の少ない日本人とどうコミュニケーションするか、ジェンダー平等は女性だけが考える問題かといったことである。

6日目は、静大生を含めたグループに分かれ、日本のアニメの一場面にてアテレコをするという日本文化体験を行った。グループに分かれてストーリーを考え、アテレコの練習をした後、発表会を行い、互いの作品を鑑賞した。

7日目は、静大生を含めたグループに分かれ、4つのテーマ「食生活」「教育」「就活・働くこと」「人間関係」の順でディスカッションを行った。食べるという生活上必須の行為から、教育現場の問題、学校教育を終えた後の働き方、そして労働現場での人間関係のように、世界観を広げて、多様な人々が存在する社会での共生を考えた。そして、オンライン掲示板アプリ Padlet（注2）を使用して全体の振り返りを行った。当日18:00に4日目、5日目から続いているグループワーク発表資料を提出した。

8日目は静大生をコメンターとして招き、グループの最終発表会を行い、当日の参加者全員で本プログラムを通して考えた「私にとっての多文化共生」を Padlet で共有した。

プログラム終了後、「私にとっての多文化共生」のレポートを提出した。

4 プログラムの評価

プログラム事後アンケートの結果を【表2】、【表3】に示す。

【表2】 海外協定校学生の回答

	主な質問事項	主な回答
1	グループワークへの日本語ネイティブの参加の必要性	<ul style="list-style-type: none"> 情報や内容の充実のために、日本にいる日本人に全日程参加してほしい。
2	参加前と参加後の変化	<ul style="list-style-type: none"> 日本語運用力の向上。 「多文化共生」についての意識の変容。 視野が広がった。概念が変わった。多様な価値観を知ることによって偏見を捨てる。 日本の文化だけでなく、日本の生活や考え方、日本人に対していい意味で印象が変化した。 参加者同士の交流で海外の文化を理解した。
3	参加してよかったこと	<ul style="list-style-type: none"> 日本が好き異なる国の学生と文化について日本語で話すことができた。 友だちがたくさんできた。 「多文化共生」について違う視点から考えることができた。
4	改善点	<ul style="list-style-type: none"> 参加申込から実施まですぐに連絡してほしい。 イスラムのお祈りの時間に配慮してほしい。
5	実施時期	<ul style="list-style-type: none"> 適当

【表3】 静岡大学学生の回答

	主な質問事項	主な内容
1	事前研修	<ul style="list-style-type: none"> 教員や他の学生と事前に知り合うことができ、当日もリラックスできた。 2部制(注3)で知り合えない学生もいたので、全員の自己紹介を共有できたらよかった。
2	参加したことによる学び	<ul style="list-style-type: none"> 日本の言語や文化に興味を持っている学生が多くいることに感動。 言語の習得方法はまず好きになることが大切。 配慮がうまくなった。より伝わりやすい日本語を使うことも心掛けた。
3	今後に生かしたいこと	<ul style="list-style-type: none"> 学習言語を使って文化を学ぶことにも目を向けたい。 国際交流の経験を英語の教員免許取得の勉強につなげたい。 これからもオンライン上でどんどん話したい 海外学生との繋がりを絶やさないようにする。 他の人との関わり合いにも生かす。 自分の留学先での交流に生かしたい。
4	実施時期	<ul style="list-style-type: none"> 適当
5	その他	<ul style="list-style-type: none"> 温かい雰囲気での楽しい時間だった。またこのような機会があったら参加したい。

アンケートの結果から、オンライン国際教育プログラムの成果として、海外協定校学生の日本語運用力の向上があげられる。しかも、母校の学生同士でなく、他大学・他国で日本語を学ぶ学生と日本語で会話できたことを喜ぶコメントが非常に多かった。

本プログラムにおける「多文化共生」は日本で暮らす外国人との共生の難しさから話題を展開した。振り返りでは、改めて自分の国が抱える多文化共生の問題について述べた学生もおり、自社会を見つめ直すきっかけとなったと言える。

静岡大学学生は、いわゆる「やさしい日本語」を自分で工夫できるようになったことが今回の成果と言える。

5 今後に向けて

オンライン国際教育プログラムを実施し、また事後アンケートの結果から見えてきた今後の課題を次に述べる。

5.1 海外学生の語学力

大学の学びとして日本語でPBLを行うのであれば、互いに討論し、理解を深められるだけの語学力、つまり日本語能力試験N3、N2レベル以上に制限することが求められる。

5.2 静大生への事前研修の充実

静大生（日本語ネイティブ）は海外学生に対して「日本文化を伝える立場」という一方的な認識が強く、特にこれから海外留学に行く予定の学生と海外留学から帰国した学生は「日本」を強く意識していた。一方で、入学したばかりの1年次学生は、自分自身の意識が変化したことを感じていた。

このことから事前研修では、協働学習においては誰もが対等な立場であり、双方向的な学びに臨む姿勢を涵養することの重要性が明らかになった。

5.3 静大生の「学び」のために

今回のプログラムでは、グループワークにおいて日本語ネイティブがイニシアチブをとることに対する懸念から、海外学生のみグループワークとした。しかし、アンケートでは、海外学生、静大生双方から、「静大生も「導入」「グループワーク」など全てに参加すべき」という意見が出された。しかし、単位認定のできない静大生に全日程参加を義務付けることはできないため、今後はこのような国際教育プログラムの正式な科目化を目指すことが目標となる。

5.4 オンライン国際共修のファシリテート

本プログラムでは「多文化共生」を異なる一人一人が幸せに生きることのできる社会作りを目指すものとして捉え、初日に導入したが、グループワーク、ディスカッションが「お国紹介」になってしまい、他者や自己をステレオタイプに落とし込む傾向が見られた。事前研修を含むプログラム期間中の教授法、ファシリテートの工夫、評価法の検討が今後の課題となる。

6 まとめ 静岡大学のオンライン国際教育の拡大

以上のように、本プログラムを実施することによって、オンライン国際教育プログラムの利点と課題が見えた。

静大生は本プログラム終了後、本学の英語プログラムに参加したり、実際に海外留学に意欲をもった学生もいた。SNSで海外学生と友達関係を続けている学生もいる。

また、8月の本プログラムに参加した海外学生の中には、引き続き10月から交換留学生として静岡大学で1年間学んだ学生もいる。海外派遣留学促進、また静岡大学で受け入れ予定の留学生に対する事前準備として意味のあるプログラムであった。

今後、オンラインプログラム実施支援体制を教務面でもさらに充実させ、海外協定校から気軽に参加できる受け入れプログラムの多様化を図ることが望まれる。

注1：渋谷実希・勝又恵理子・古矢知子・前川志津・森幸穂（2018）『プレゼンテーションの基本 協働学習で学ぶスピーチ型にはまるな、異なれ！』（凡人社）

注2：<https://ja.padlet.com/>（2023年7月31日アクセス）

注3：事前研修には全員が同じ時間に集まることができなかつたため、2回に分けて行った。